

皆の広場

素人の歴史考⑪「飛鳥古代史（592～710）」

自文科 永野 徹

[1]はじめに

H25.11.16

①飛鳥時代まで

神武天皇 初代(神武天皇)から欠史八代(8人)天皇を経て9代(開化天皇)まで存在感が薄い。10代天皇まで葛城王朝でその後三輪山・崇神王朝になったとの勝手な推測もします。

崇神天皇 10代・崇神天皇は山の辺道・桜井寄りに磯城瑞籬(しきみずかき)宮遺跡と行燈山古墳が残り実在性の高い大王と言われている。その後、垂仁、景行、成務、仲哀天皇(14代)と続いて15代・応神天皇から25代・武烈天皇までは河内王朝時代となる。

用明天皇 続いて継体天皇(26代)から聖徳太子の父、用明天皇(31代)を経て飛鳥時代となる。

推古天皇 飛鳥時代は崇峻天皇(592年)から和同3年(710年)まで118年間飛鳥に都が置かれていた時代を指す。狭義には用明天皇の皇后・推古天皇元年(593年)に聖徳太子が摂政になってから持統天皇(694年)が藤原京へ移転するまで102年間を飛鳥時代、その後平城京へ都が遷る710年までを白鳳時代と主に文化面で分割することがある。

②初期大和王朝はなぜ奈良に

現在地図を見ていると、古代になぜ奈良が都地点に選ばれたのか不思議に思う。

神武東征 その点、10代・応神天皇から始まる河内王朝は瀬戸内海に近く納得しやすい。神武東征が河内で終わらず、奈良へ向かう背景は、現在と違って難波(なにわ)の上町台地は巾が狭く渦のイメージが強く、淀川の洪水が危険であったか芦が生えて寄り付く港がなかったのかも知れない。また当時大阪平野は平地が少なく、河内湖が沼状態でいきなり生駒山の麓へ寄りつくことになるので大和川を遡り奈良に棲みかを求めたのではと推測しますが、実際は解りません。更に奈良盆地は昔は湖で、当時も沼地で有った為、山の辺とか飛鳥等の高台を生活場所として選択したのではと憶測します。

河内湖 同様に、垂水～明石～神戸～尼崎なども最適地であるはずですが、山が海に迫り

大和川 瀬戸内沿岸は雨が少なく水不足と台風などの被害が大きいと縄文、弥生時代から

奈良湖 伝承されていたのかも知れません。それでも生活するには天候に恵まれた最良の地点と思われるのに何故”奈良”が東遷の地に選ばれたのだろうか。

③甘檜丘(飛鳥の風景)

飛鳥京を見下ろす最適地の甘檜丘は標高150mで、東を望むと飛鳥川が石舞台上流から甘檜丘に沿って北西に向きを変えて藤原京跡へと流れている。

飛鳥川 奈良への主要な古代交通水路は飛鳥川も含めて全て大和川に合流して難波津に繋がる。飛鳥川の対岸には飛鳥集落があり、その南部に日本最初の本格的寺院・飛鳥寺がある。飛鳥寺手前は「大槻の広場」と呼ばれケヤキの大木の下で中大兄皇子と中臣鎌足の出会いの場であった。飛鳥寺の右(南)側の後方に7世紀歴代王宮が営まれた飛鳥宮跡と橘寺、岡寺がある。

飛鳥寺

④飛鳥時代とは

飛鳥時代とは遣隋使・遣唐使による新情報を吸収して、大化の改新・白村江の戦い

遣隋使 壬申の乱と続く激動の変化を経ながら氏族社会から公地公民制へと中央集権国家

遣唐使 確立を目指した律令国家形成前の激変の時代である。

飛鳥時代は崇峻天皇(592年)から和同3年(710年)まで118年間飛鳥の都時代

⑤飛鳥の宮

飛鳥に宮を営んだ最初の天皇は允恭天皇の遠つ飛鳥宮(古事記)、続いて顕宗天皇近つ飛鳥八釣宮(日本書紀)、また飛鳥周辺に宣化天皇の桧隈蘆人宮がある。その後欽明、敏達、用明は飛鳥を離れ、推古天皇が飛鳥に豊浦、小墾田宮を営む。

[2]飛鳥時代のできごと

(1)飛鳥時代直前: 仏教伝来と飛鳥寺創建(588～609)

①仏教公伝(欽明13—552)

仏教伝来 欽明13年(552)、百済の聖明王は西部姫氏達・怒唎斯致契等(ヌリシケイ)を遣わし金堂仏一尊と経典を献上。欽明天皇は大変喜び蘇我稲目宿禰に預ける。

欽明天皇は朝鮮半島・中国大陸で祀られており倭国も反目できないのではと稲目は判断。所が物部尾輿と中臣鎌子は倭国には古来、天皇は神を祀ってきたと対立。

②崇仏戦争(用明2—587)

物部尾興 舒明13年(552)百濟聖明王から釈迦如来像・仏具・経論が贈られ仏教公伝となる。
文明開化派の蘇我稲目が安置と礼拝を許されたが物部尾興の讒言により破却された。
蘇我馬子 用明2年(587)、用明天皇が逝去、その後継者争いと連動しながら崇仏派・蘇我馬子
と廃仏派・物部守屋が武力衝突に及び馬子・聖徳太子派が勝利した。
聖徳太子 蘇我馬子と聖徳太子は夫々、勝利の暁には寺院建立と仏法流布を誓ったと言われ、
馬子は飛鳥寺を蘇我氏の氏寺として、太子は法隆寺・四天王寺創建に着手した。

③飛鳥寺着手(588)と高度渡来人文化

渡来人 飛鳥伽藍建設着手に当たり、百濟・高句麗から寺工(僧侶)・路盤博士・瓦博士・画工
専門技術 などの専門技術者(渡来人)が大量に派遣された。
推古元年(593)には「三宝興隆詔」が發布され朝廷の豪族達が競って氏寺を建立して
寺院建設 「君親の恩」報いる事になった。推古32年(624)には総数46寺院、僧816人、尼569人。
推古4年(596)に堂塔が完成し高句麗僧慧慈、百濟僧慧聡が在住している。
飛鳥仏 推古13年(605)、造仏工・鞍作鳥(くらつくりのとり)が銅製の丈六仏像製作に着手し
609年に完了。蘇我氏の威光を示す寺院は20年経って立派に完成した。

④飛鳥寺伽藍配置と瓦技術

飛鳥寺は五重塔を中心に一塔三金堂式の飛鳥寺伽藍配置と呼ばれる高句麗様式。
伽藍様式 同形式には高句麗に清岩里廃寺がある。百濟には扶余北郊外に王興寺がある。
飛鳥寺は日本最初の瓦葺建築であった。丸瓦と平瓦を交互に組合せた本瓦葺きで
瓦製作 軒先は蓮華紋瓦で葺かれた。その後の瓦葺き屋根の瓦製作技術・瓦紋・造営体制
などの原点となる技術である。連弁の先端に切り込みがある桜花状の素弁蓮華紋の
軒丸瓦タイプは花組と呼ばれ、蘇我氏、上宮王家に係る寺院である。
瓦を焼く窯は、山背・、河内・播磨・備中と遠隔地に配置され、複数の寺院に供給する
事になった。

(2)推古朝(593~628)

1)推古朝とアジア情勢

①中国の状況(581:隋誕生)

隋誕生 4世紀以降、南北の対立時代に入り華北で遊牧民、長江流域で漢族王朝が続く。
華北の北魏が534年に分裂して東魏は北斉、西魏は北周が支配していたが北周
が統一した後、581年にクーデタで軍閥の楊堅が新王朝を建て、隋の文帝となる。
隋の文帝は開皇律令を制定して中央・地方の行政組織を改革した。
2代・煬帝の時最盛期を迎え、首都長安の他に副都洛陽を建設し、政治の安定
により文化・宗教も大いに栄えた。
6世紀後半、隋は常に遊牧民・突厥と高句麗対策に追われた。
煬帝は607年、西の突厥を撃破し、その後東の高句麗対策として新羅と提携して
589年、30万の隋軍で高句麗を攻めたが不調に終わった。其の為、高句麗は
高句麗は570年に新羅の背後勢力である倭に使者を送ってきた。

中国隋誕生 このような、隋を中心とする東アジア情勢化下で聖徳太子・蘇我馬子が倭国をかじ取る
こととなった。蘇我氏は6世紀以来、大臣を世襲し、推古朝の政権中枢部は蘇我色が
濃いものとなった。

②朝鮮半島(新羅と任那)

(朝鮮半島 600年に新羅と任那が争い、倭王朝は境部臣代将軍、穗積臣副将軍を派遣して新羅
百済台頭 を攻めて5つの城を攻め落としたので、新羅は和平を申出て毎年調(貢納物)を奉納
する事になった。562年から伽耶全域が新羅に併存されていたがその復興がなかった。
「任那の調」と言う名目で倭の権益認める話し合いが実は有耶無耶の状態が続く。
この戦いの背景には百濟・高句麗との連携で「新羅と戦いつつ隋に備える」との
(伽耶対応 国際戦略があったと言える。ところが、倭軍が半島から撤収すると新羅は伽耶支配
出兵ならずを回復した。推古9年(601年)、高句麗・百済に支援を乞い軍略を練り、推古10年(602)
聖徳太子の弟「久目皇子」を大将として北九州に集結したが病気で亡くなり、後任に
当摩皇子が任じられたが妻の死亡で飛鳥に戻ってしまった為、新羅の伽耶支配は
続き倭は朝鮮半島の拠点を失った。

③部民制(律令前の制度)

7世紀前半まで倭国では、大王を「太后と太子」が補佐する体制が取られて、
太后に私部(きさべ)、太子に壬生部(みぶべ)と言う部民が置かれていた。

大王を王族が取り巻き、畿内の豪族が臣従した。上級豪族は大夫と呼ばれ国政に参加。そのトップが蘇我氏等の世襲の大臣で、王族・豪族を支えたのは部民制であった。倭王朝が全国支配を進める過程で、地方豪族の領民を裂きとって部民とし、町の王族・豪族が分割領有したのが部民である。この場合部民は王権の意のままにならない。六世紀の倭国では皇位継承は父子直径とされ、ここには王族の存在意義があった。つまり天皇を父に持ち、皇女を母に持つ人物だけが直系と認められ傍系天皇は一代限り。敏達天皇が亡くなった時、額田部皇女(推古天皇)を母に持つ竹田皇子にだけ皇位継承権があったが夭折した為、蘇我堅塩媛を母に持つ用明が傍系天皇として即位した。其の為、用明死後皇位継承に問題が生じ、後の推古天皇が継承して後、厩戸皇子(聖徳太子)を直系候補とする事で王権周囲は合意が形成されつつあった。

④遣隋使派遣

第1回 ・推古8(600):第1回遣隋使派遣

推古8年は新羅に軍隊を派遣して交戦し、隋にも最初の遣隋使を派遣して倭が積極的な対外政策を始めた年である。

随書(倭国伝)・倭王(アメ・タリシコ・オホキミ)が隋に朝貢

「倭王は天を兄、日を弟とし、天がまだ明けない早朝に政務を取り日が出たらこれを終えて弟に委ねる」・・・文帝は道理に合わないと言われ改めさせたと伝。

推古女性天皇時代に倭王の称号が男性称号「アメ・タリシコ」は疑問である。

第2回 ・推古15(607):第2回遣隋使派遣

小野妹子が遣隋使として派遣された。目的は仏法を学ぶことにあったが国書の

「日出処の天子、日没する所の天子に致す。恙なきや」文言が煬帝を怒らせた。

妹子の帰国に裴世清が随行して、倭国の国情を視察しその帰国には再び妹子が随伴した。他に高向玄理、南淵請康・僧旻が随行した。

第3回 ・推古22(614):犬上御田鍬(いぬがみみたすき)派遣され、翌年帰国。

第4～6回 遣隋使は4～6回(600年、607年、608年、610年、614年)派遣された。

・推古24(618):高句麗使渡来し隋の高句麗遠征失敗を報告(隋朝滅亡、唐王朝興る)

2)推古朝の改革

推古天皇 推古天皇は即位以来、豊浦宮で政務を取っていたが、推古11(603)年小墾田宮に遷宮。

聖徳太子 豊浦宮跡は寺院となった。小墾田宮は後の朝堂院、大極殿、内裏に発展する原型。

の改革 小墾田(おわりだ)は西は雷丘周辺、東は安倍山田道に到る飛鳥の北口エリアである。

王宮は南北2つのブロックに分れて、南門を入った所が臣下の空間で中央に朝廷、東西に朝堂が建つ。朝廷の北端に天皇の大殿入口の大門があり出入りが厳しく制限される。

第一次遣隋使の報告で隋の巨大な王宮情報が入り、豊浦から小墾田への遷宮が生じた。

②冠位十二階(推古11年:603)

推古天皇時代、小墾田に遷宮して2か月後に冠位十二階が制定604年に冠位を与えた。

支配者層に儒教的な名前の12の位を設けて(大小の徳・仁・礼・信・義・智)で冠を色分。

五行説に基づき、冠色も青・赤・黄・白・黒であったらしい。このような改革から律令官僚制の原点が推古朝から始まったともいえるが王族・大臣は冠位12階を超越した存在であった中央貴族の大夫以下に限られ、地方豪族には冠位は与えられず、部民制が残っていた。

③憲法17条(推古12年:604)

推古12年(604)、聖徳太子が憲法17条を制定した。儒教思想を基本としたが以下の条。

第1条:「和を以て貴しとなし、忤うることなきを旨とせよ」

第2条:「篤く三宝を敬え」

第3条:「詔を承り手は必ず謹め」

第17条:「それ事は独断すべからず」

内容は、仏教(2条)と礼(4条)を重んじた新政治秩序を目指した訓令で君主制、官僚制の初歩的な段階である。

④聖徳太子(厩戸皇子)と斑鳩宮

聖徳太子が斑鳩に宮室を作り始めたのは推古9年(601)のこと。聖徳太子一族「上宮王家」が飛鳥宮から15Kmほど離れたこの地に拠点を有した。この地は大和川水運の交通要所で、飛鳥と難波を結ぶ川船の要衝で、政治的にも、経済的にも重要な地点であった。陸路では小墾田王宮から斜めに太子道が、難波方向には竜田道が通じていた。斑鳩宮は法隆寺の前身となった「若草伽藍」が中心で、西隣に斑鳩寺、東には法起寺、法輪寺がある。斑鳩地域には上宮王家や膳氏の宮廷があったと推測される。

また聖徳太子は推古15年(607)壬生部が与えられ、上宮王家は、全国各地に屯倉を有した。推古天皇の皇位継承者であった聖徳太子は推古29年((621)に亡くなった。

聖徳太子の母、間人皇女も同年なくなり、膳夫人も622年に亡くなっている。

⑤史書と天皇称号

日本書紀によれば、推古28年(620)年に聖徳太子と蘇我馬子が「天皇記・国記および臣・連・伴造・国造・公民の本記」を録したとされる。6世紀までに作成されていた「帝紀」「旧辞」がベースになった推測される。但し公民は律令体制下の公民ではなく、王族・豪族所有の部民を指す。儀礼整備により政治秩序への関心が高まり、史書が編纂された。「天皇記」の天皇の名称は「推古朝成立説」と「天武朝成立説」があるが天智朝以前かも知れない。

3)大化の改新前

①上宮王家から押坂王家へ(敏達一彦人大兄一舒明・田村皇子)

上宮王家の推古天皇、蘇我馬子、聖徳太子等が蘇我家系統に対して、宣化天皇皇女(石姫)と欽明天皇との間に生まれた敏達は王族である。敏達と額田部皇女(推古)を親とする竹田皇子並びに敏達と息長眞手王の娘・広姫を親とする彦人大兄皇子は押坂直系王家である。彦人皇子の子息は田村皇子=舒明天皇であり、蘇我氏と血縁関係の無い王家系統である。彦人大兄王子は城上の押坂宮(桜井市忍坂)で育ち、そこに舒明天皇陵を始めとして押坂一族の陵墓がある。押坂宮には巨大な部族集団である刑部(オサカベ)が所属していた。押坂王家の巨大な部民集団=刑部(おさかべ)は15,000戸超え、倭国人口の一割に達する。彦人大兄の別宮「水派宮ミタノミヤ」は奈良県西部の広瀬にあり、父・敏達天皇の殯が広瀬で行われた経緯もあり、彦人大兄の墓も広瀬にある。

②舒明朝 この地点も押坂家の勢力拠点である。

舒明朝誕生 聖徳太子が亡くなっても、推古天皇は皇位継承者を指名しなかった。やがて蘇我馬子が推古34(626)に死去して長子・蝦夷が跡を継ぎ、1年後に推古天皇も死去。

舒明天皇(田村皇子) 推古天皇は臨終に際して押坂王家の田村皇子と上宮王家の山背皇子を呼び両人を諭した。田村皇子からこの遺詔を聞いた蘇我蝦夷大臣は大夫を私邸に招き何れを天皇にするか諮ったが田村の遺詔から推古の意が田村にあるようだが、山背はそうではないと言い意見は二つに分かれた。そんな中、境部摩理勢が強く山背大兄王王を押し蝦夷に反逆した為、蝦夷は摩理勢を殺害、王族の629年田村皇子が即位して舒明天皇が誕生。舒明は即位すると宝皇女を皇后に、630年岡本宮に遷居した。この岡本宮が636年焼失し、田中宮に移転し、百済川沿いに百済宮と天皇家勅願寺として百済大寺(大安寺)を建立。百済大寺跡が吉備池廃寺である。百済大寺は飛鳥寺の金堂面積の3倍程あり塔の基壇は約7倍高さ80m前後と桁違いの巨大寺院で官大寺の筆頭にあった。

舒明天皇 舒明天皇は外交・内政において積極的であった。外的には遣唐使派遣、朝鮮三国との対応内的には、北は蝦夷、南は屋久島まで勢力を拡大し、王宮への参集を励行させて、天皇を中心とする政治秩序の確立に励んでいる。

推古朝から舒明朝にかけて、中国では隋が滅び、唐が誕生している。

③飛鳥宮の変遷

飛鳥の宮 舒明天皇の飛鳥岡本宮(631~636)のあとに皇極天皇が飛鳥板蓋宮(643~645)を営み更に斉明天皇が後飛鳥岡本宮(656加羅)を、天武・持統天皇が飛鳥浄御原宮(672加羅)を飛鳥の北部に造営。これ等を総称して飛鳥京跡と呼ばれている。

④中国唐の誕生(隋から唐へ)

唐の誕生 煬帝の治世、隋の国力は最も充実していて、洛陽・長安から南は江南、北は涿郡まで大運河を開削するが、その経済、労働負担で民衆は疲労して不満が溢れてきた。そうした中、対高句麗戦争に突入して3次に渡る大規模出兵で民の反感を招いた。唐の第一次高句麗遠征(612)、第2次遠征(613)、第3次高句麗出兵(614)はいずれも失敗、国内各地は反乱で群雄割拠となり北方から突厥が介入し、煬帝は618年揚州で殺害された。この内乱の中、北方の太原に派遣されていた李淵が617年挙兵して長安城を制圧し、618年皇帝位に就いた。これが唐の初代皇帝高祖である。その後10年ほど混乱が続き、626年、李世民が全国統一を成し遂げ二代目・太宗皇帝となる。太宗は安定した政治で対外にも積極的な膨張政策で「貞観の治」と呼ばれた。

⑤遣隋唐使派遣

推古・舒明天皇時代以下のとおり隋・唐・朝鮮半島と交流。

614年: 推古22年(614)、犬上御田鍬は遣隋使とし派遣された。

620年: 推古26年(618)、高句麗使が煬帝の軍勢を撃破した時の唐掠奪品を携行

630年: 3月、高句麗使、百済使が来航、唐王朝が中国統一後のできごと。

630年: 8月、舒明天皇が第1回遣唐使(犬上御田鍬・薬師恵日)を大唐に派遣。

631年: 舒明天皇は唐使来航に備えて難波大郡を修理

632年: 難波津に来航した唐使(高表仁)を難波吉士小槻(ナノキシヅキ)が出迎え

参考:(朝鮮三国の遣唐使派遣状況)

高句麗: 6回(619~630)

百済: 5回(621~630)

新羅: 7回(621~630)

⑤遣隋使・遣唐使の帰国

遣隋使帰国(遣隋使の帰国): 留学僧・留学生が隋・唐の最新情報を携えて大化の改新に貢献

推古30(622): 聖徳太子死去

推古31(623): 留学僧(恵齊、恵光)、留学生(医克斯恵日630~、倭漢直ヤマトアヤノタイ福因618~)

舒明3(631): 留学僧(霊雲、僧旻608~、勝鳥養)

舒明11(639): 留学僧(恵隠、恵雲608~)、

舒明12(640): 留学僧(南淵請康608~)、留学生(高向玄理608~)

南淵請安の儒教: 門下生(中大兄皇子、中臣鎌足、蘇我入鹿等など)

僧旻の周易:

⑤アジアの混乱

中国大陸 中国では唐2代目太宗が628年に中国を統一して版図拡大に踏み出した。

唐 630年: 唐は東突厥を降してモンゴル高原を唐の支配下におく。

635年: 唐は青海の吐谷渾を降す、高句麗は唐の侵略を恐れ千里に及ぶ長城建設開始。

640年: 唐は西域の漢人国家・高昌を制覇

641年: 唐・太宗は西方を制覇して、東方の高句麗を偵察

645年: 唐、高句麗に侵入、唐太宗の第1回高句麗遠征

647年: 唐太宗の第2回高句麗遠征

648年: 唐太宗の第3回高句麗遠征、太宗死没で高句麗遠征を中止。

朝鮮半島 百済 642年: 百済の義慈王が新羅を攻めて40余城を落とす。旧伽耶地域を占拠。

643年: 百済で扶余豊を廃太子、一族と一緒に大臣・沙宅智積も倭国へ追放

新羅 642年: 新羅は百済・高句麗の攻撃に遭う

643年: 新羅は唐に百済・高句麗の侵略を訴え、救援要請。

647年: 新羅では「魼曇の乱」で金春秋が魼曇(ひどん)を倒す

高句麗 642年: 高句麗大臣・泉蓋蘇文がクーデタを起し、栄留王を殺害し莫離支となる。百済と連携して新羅・党項城を攻撃

⑥上宮王家滅亡

斑鳩の里 日本書紀によれば、皇極4年(643)蘇我入鹿等が「上宮王家を廃し、古人大兄皇子を
山背大兄 天皇に」と語り、巨勢徳太、土師娑婆連に命じて斑鳩の宮を急襲。山背大兄皇子は
皇子等自害 辛くも生駒山に逃れたが、再起は民を苦しめる事になると思い、数日後、上宮家一家
は斑鳩寺に戻り、全員23人は自害したと言う。この事件は蘇我入鹿の独断ではなく
有力王族・豪族が結束して起したものと推測されている。

(3)大化の改新

1)乙巳の変(645.6): 蘇我入鹿を暗殺

板蓋の宮 中大兄皇子と中臣鎌足が中心となって朝鮮三国調使渡来の席で時の大臣蘇我入鹿を
入鹿暗殺 暗殺。大陸・朝鮮半島の混乱の影響もあったが、舒明朝の遣隋使・遣唐使の帰国に
よる文明開花があり、舒明亡き後は皇后・皇極が即位した。この当時山背上宮王家と
皇極天皇 押坂家中大兄皇子と古人大兄皇子3人が皇位継承者候補で、蘇我氏の威光で
舒明皇后・皇極が皇位についた。蘇我氏はまず山背大兄皇子を攻めて上宮家を攻めて
蘇我本家 滅亡させる。中大兄皇子と中臣鎌足は蘇我氏の専横を嫌い、皇極4年(645)飛鳥板蓋
滅亡 の宮において蘇我入鹿を暗殺した。その後、甘樫丘の蘇我蝦夷を攻めて蘇我本宗家
を滅ぼした。これを「乙巳の変」と言う。

2)大化の改新(645)

①孝徳天皇即位、中大兄皇太子

・奈良時代の律令官僚制へ移行する前哨戦として公地公民制の画期的なシステム変更
乙巳の変の2日後に皇極天皇の兄弟・孝徳天皇が即位し、倭国最初の年号「大化」

を定めた。(大化改新詔646年の主要改革): 公地公民制と官僚体制の立ち上げ

・中大兄皇子が皇太子就任、左右大臣(阿部内麻呂、石川麻呂)、

国博士(僧旻・高向玄理)を任命。

・大化5(649): 中大兄皇子色で大化政権時の両大臣交替

・左大臣安倍内麻呂死去・・・後任者は巨勢徳陀

・右大臣蘇我石川麻呂肅清・・・後任者は大伴長徳

②孝徳天皇・中大兄皇子の改革

○前期難波宮

イ)遷都: 645年12月に孝徳天皇は難波小郡宮(オゴリミヤ)へ遷都(広大な朝堂院と官衛は後に初期難波宮・小郡宮は難波堀江の低地に、前期難波宮「難波多くの豊崎宮」は652年完成。孝徳天皇は難波宮遷宮で仏事遷宮を、その後も仏教法会を開催し仏教を国策の基盤化又、儒教の合理主義採用として人民の声を聴く「鐘櫃の制」があり律令制の起点となった。

ロ)官僚制: 大化3年(647)に十三階冠位制、大化5年に十九冠位制採用。中央に八省百官を置く。冠位12階は2回に渡り改定され新しい官僚制度が発足。
国博士として有能な帰還遣隋使である留学僧・僧旻、留学生・高向玄理を採用。

公地公民ハ)部民屯倉廃止(646): 臣・連・伴造・国造の部民、王族・豪族の部民・行部を廃止。
(皇太子が奏上)

ニ)地方政治組織改革: 評制649 (国一評一五十戸)制度による公民支配、東国へ国司派遣と倭国六県で人民・土地調査(公民五十戸、奈良律令の庚午年籍への前段)
649年: 全国に評(ホリ)制を布く(初期評は全国で約500評家)
中央派遣国司(国宰クニミコモチ)が地方の評を統べる。財政基盤として出挙の稲を創設

ホ)籍帳制と班田収授法の創始(田の調、戸別の調)

ヘ)税制の改革(租・庸・調): 戸籍・田畑の調査・物品＝租調税と労働＝庸・仕丁の徴発

③孝徳朝その他改革

仏教と儒教に基づく政治秩序は推古朝で模索されたが大化改新により格段に深化。

イ)儒教的合理主義

日本書紀には孝徳天皇は「人なり、柔仁にして儒を好む」とある。

旧俗・悪習を否定し合理的なシステムを指向;

・645年「鐘櫃の制」: 朝廷に訴状を入れる櫃を置き、鐘を敲いて訴えさせ雑役停止例など。

・嘘は駄目、恐喝の禁止、利益に走らない、我欲に走らない、旅の安全確保

・葬儀・儀礼・古墳の簡素化・大化薄葬令(646)

ロ)仏教が国家的儀礼

孝徳天皇は遣唐使帰国者「僧旻」「高向玄理」を改新政権の国博士として重用。

難波長柄豊崎宮において、王宮で初めて「読経・燃頭」と呼ばれる仏教儀礼を挙行。

これは大津宮や浄御原宮にも受け継がれ仏教が王宮内部へ浸透する切っ掛けと

なった。651年、遷都仏事には21000人の僧尼が参列、翌年の大晦日法会には天下

僧尼が内裏に招かれると言う事態で仏教が国家的法会を行う場となった。

孝徳天皇は645年、蘇我氏の飛鳥寺を接收するなどして、仏教を興隆する旨宣告して十師をおいて仏教界を指導させ、豪族の寺院造営を援助し大幅に寺院の数が増えた。

倭国最初の勅願寺は百済大寺。

・難波長柄宮の朝堂院北端にある2つの八角殿は仏教施設ではないかという意見もある。

・日本書紀では孝徳天皇が「仏法を尊び、神道を軽んず」と評す。

ハ)礼制他

・難波朝廷の立礼: 難波豊崎宮は国家的儀礼を荘重に執り行う為に建設されたとも言われ中国色の濃い礼法を重んじた。

・交通・物流の円滑化: 市司・渡子の手数料禁止、橋梁の設置など。

・地方国司へ開墾奨励、池・溝整備、

④齊明天皇重祚(655年:)

・白雉4(653)に政権分裂: 孝徳天皇は難波長柄豊崎宮置き去りで中大兄皇子が全員飛鳥河辺行宮へ遷都。

・655年: 天智生母の皇極天皇が齊明天皇として重祚(飛鳥板蓋宮で即位)

舒明(飛鳥岡本宮跡へ)→齊明(飛鳥板蓋後宮)焼失→飛鳥川原宮(後飛鳥岡本宮)

※飛鳥宮跡3層: 1期(舒明: 岡本宮)、2期(齊明: 板蓋宮)、3期(齊明: 後岡本宮)

・658年: 孝徳天皇の遺児・有間皇子は和歌山・藤白坂で謀反の罪で絞殺された

後飛鳥岡本宮は朝堂院は無く、孝徳朝・難波宮ほど壮麗でないが官衛群が配置され

官僚制の機能が受け継がれていたようである。補完施設として、齊明の浪費と酷評

される酒船石遺跡、亀形石槽、外交儀礼施設の石神遺跡、天智の水落遺跡等がある。

⑤孝徳・斉明朝の成果

イ)蝦夷支配(城柵設置)

孝徳朝から斉明朝にかけて蝦夷支配が進められた。(高句麗への北方航路開拓目的)

日本海側:越後～東北～北海道(新潟:淳足柵、磐船柵)

太平洋側:蝦夷支配拠点城柵の造営(仙台平野:郡山遺跡、

皇極元(642)年:蝦夷数千人が倭王朝の支配下

孝徳朝: 新潟県に淳足柵(647)、磐船柵(648)・3次に渡る蝦夷征伐(国-評-50戸制)

1次: 斉明4(658)に秋田～能代～津軽～北海道まで

2次: 斉明5(659)に同上北海道まで(陸奥・越に国群司が置かれる)

3次: 斉明6(660)に石狩川で肅慎を帰順させる

斉明朝: 北伐は斉明6(660)で終わる。(660年朝鮮半島急変で百済が滅ぶ)

ロ)中国・朝鮮半島情勢

649年: 唐太宗の死によって高句麗征討は一時終了。

651年: 倭国は白雉2(651)年に新羅への反感が高まり高句麗・百済と提携。

一方、唐には遣唐使を派遣: 白雉4(653)、白雉5(654)、斉明5(659)

655年: 太宗の死後、唐では2代目高宗が即位して、651年百済・高句麗に対し新羅と

和平を命じたが、655年新羅に侵攻した為、

657年: 唐の高宗は太宗時代の懸案・西域の西突厥に契苾何力と蘇定方を投入して平定。

659年: 東域の高句麗平定に契苾何力(ケヒツカリキ)を投入

660年: 唐の蘇定方が10万の軍勢を引いて、新羅5万が陸から百済の泗沘城(シ)、

熊津城(ユウシン)を攻めて、百済が滅亡。

倭が百済滅亡を知るのは斉明6(660)年9月で、10月に百済から鬼室福信の

使者が質として倭に居る王子豊璋を国王として再起したいので返還要求。

倭の斉明天皇はこれを認め百済救援の為、全国規模で軍事動員をお行い

661年: 斉明7年、百済救援の為斉明天皇は九州・娜の大津(磐瀬行宮)から朝倉橋

広庭宮へと遷都したが7月に斉明は死去し、百済遠征は中止。(御船西征)

(4)近江朝 (天智天皇)

①白村江の大敗(唐は百済、高句麗を支配下に、次は倭国を攻める?)

斉明7(661)年、斉明天皇死去に伴い、中大兄皇子は皇太子のまま国政を取り、博多

長津宮で軍政会議を開き、海外対応を協議して、天智6(667)年に斉明天皇を牽牛子塚

に埋葬。661年4月、再び百済・鬼室福信から王子豊璋を国王として帰還願いがあり、

中大兄は8月に豊璋に5千の兵をつけ、安曇比羅夫を将軍として前軍、後軍の

2郡編成で出発させた。

○唐・新羅と高句麗・百済・倭国の争い

661年、唐の蘇定方が高句麗の都・平壤を包囲。

662年、2月頃陀水の戦いで唐軍が大敗、また百済側では5月に豊璋が王位を継承。

662年倭は高句麗から救援を要請され第1次百済進行軍を周留城に駐留し一時休止。

662年、唐の劉仁願、劉仁軌が熊津付近で百済軍を破り、真岷城を陥落。

663(天智2)、前・中・後の2.7万人第2次軍を派遣。前軍は新羅の2つの城を攻略。

白村江敗戦 663年、唐・新羅軍が豊璋のいる周留城を包囲白村江に唐軍船170艘、倭水軍は

これと闘い緒戦で敗れ、続いて中軍も壊滅的に破れ、400艘の船を失った。

百済滅亡 百済の拠点周留城が陥落し、唐の百済支配が確定した。

この戦いで、倭国は、第一次、第二次進行軍と豊璋護衛軍を合わせて

5万人強を西日本から派遣。

666年 高句麗で反唐の泉蓋蘇文が死去し、兄弟争いで国内内紛状態になる。

高句麗滅亡 668年、この時、唐・新羅連合軍が高句麗王都・平壤を陥落し、高句麗滅亡

倭討伐準備 669年、唐は倭討伐準備として軍船修理を始める

②天智の国土防衛準備

倭国の防備

防人

烽火台

山城

神護石

・白村江の倭軍大敗、百済滅亡、その後高句麗の滅亡と続き次は倭国と唐
天智称制(即位せず国政運営)は取急ぎ大宰府防衛網として以下の対策を

664年、実行。攻撃を目の前に・白村江の敗戦翌年・天智3年対馬・壱岐・北九州に

防人(沿岸防備兵)を配備し、緊急連絡の為に烽火台が置かれた。

・筑紫大宰府を博多湾沿岸から内陸部・現在の太宰府市に移転。

・沿岸部から大宰府までに防塁を設置、博多湾部には巾60m * 深さ4mの濠で
水城を設置

665年 大宰府の南北に大野城、其肆城(キイジョウ)を築城(百済職人による朝鮮式山城)

大野城は周囲に土塁石塁をめぐらせ四王寺山頂部に造営。(大宰府からの

緊急避難所)、其肆城も同構造を持ち、有明海方面からの備え。

・大宰府以外の防備

天智朝には九州北部から瀬戸内海を経て畿内内部にまで朝鮮式要塞城が。

・九州に鞠智(クチ)城、三野城、稻積城、神籠石土塁

・長門の某城、対馬の金田城、讃岐の屋島城、備後の茨城、大和の高安城、

○天智朝の国政

天智朝で中央集権化の官僚制と公民制が整備されて初期律令国家がほぼ完成された。

③近江遷都(天智6年)、天智天皇即位(天智7年668)

天智天皇の近江京・大津宮は現在の大津市錦織遺跡と確定。白村江の大敗で唐の脅威と防衛上の理由から瀬戸内海から離れて、東国に避難できる大津が選ばれたものか。

667年 中大兄は防衛上の理由からと思われるが都を後飛鳥岡本宮から近江へ遷都。瀬戸内海から遠く、畿内北限の逢坂山を越えた琵琶湖岸で東国にも避難可能場所。大津北部には舒明天皇、齊明天皇の平浦宮と言う離宮が

668年 あり、天智も懐旧の場。天智7年に中大兄皇子がようやく天智天皇即位。

④中臣鎌足と藤原氏誕生

中臣鎌足 天智朝の政治を支えたのが中臣鎌足(後藤原姓を受領)で、僧旻に「周易」を、南淵請安に「儒教」を学び、天智から国政では内臣として「軍事・国政の重要事項は鎌足に

藤原氏誕生 任せられた。大きな成果は、鎌足が礼儀・礼制の成文法典として近江令を編纂。

中臣の鎌足は中大兄皇子(後の天智天皇)と飛鳥宮の槻広場で出会い、「乙巳の変」政変を遂行した人物で、儒教・仏教・国家体制にも卓越していた。

天智8年(669)、鎌足は近江京で死の床に就いた時、天智天皇が見舞いに訪れ最高位の大識冠、内大臣、藤原の姓を与えた。鎌足の居住地が飛鳥北方の藤原第であった事から藤原氏の名を授けられたと言われ子供、不比等が相続して藤原家は現在まで生延びている。

⑤甲子の宣(664年:豪族の統制強化)

白村江の戦いから半年後、天智3(664)、中大兄皇子は勅命「甲子の宣」を布告。

(甲子の宣)=かつしのせん:支配層の統制強化

1)26階冠位制:大化5年(649)19冠位制の改革版で官僚機構管理の強化が狙い。

冠位制は官人個人を管轄するもので、天武14(685)まで20年間使われた。

2)氏上(ウジガミ)制:氏と言う部族団体の支配を王権に結集させる狙い。

氏上制度は氏の代表者を定め、各階級毎に武器を新任と忠誠のシンボルとして与えて親族集団に対して王権側から統制を加えたもの。

3)氏上制=民部(カキベ)、家部(ヤカベ)制

公民制を前提に氏上に特権を与え、王権に服従を求めたもの。

氏の代表者に民部・家部(奴婢)が認められた。氏の奴隷民を把握し、認めた。

⑥庚午年籍(670年:倭国最初の戸籍作成)

・我国最初の戸籍制定:日本書紀によると天智9(670)「戸籍を造る盗賊と浮浪とを断む」

・倭王朝は支配層の統制強化を終えると全国人民の徹底的掌握を図り、人民支配台帳の作成に乗り出した。運よく、唐に対する国家危機を豪族も共有し、スムーズに進んだ。

・倭国全人民の五十戸単位の戸籍(男性・女性、良民・賤民に拘らず把握)

・庚午年籍には人民の姓名が記載されており「氏姓の根本台帳」でもある。

⑦近江令(671年施行)

天智10(671)年、天智天皇は「冠位(26階)・法度の事」を施行。

「藤氏家伝」によれば、天智天皇は藤原鎌足に「礼儀」と「律令」の編纂を命じたとある。

鎌足は天智7年(668)にほぼ法典編集を終えたいが、近江令が現存しない為、実在したのか議論を呼んでいる。

天智10(671)年、近江令施行前日に新官制が定められた。

近江令施行に伴い大化5年の「八省百官」が廃止され、中央・地方の新官制が始動した。

太政大臣(大友皇子)、左大臣(蘇我赤兄)、右大臣(中臣金)、

御史大夫(蘇我果安、巨勢人、紀大人)、のちの大納言。

内臣、国博士を廃して、新たに太政大臣と御史大夫を置いた。

中央は(太政官一大弁官一六官)体性、地方は(国一評一五十戸)が存続

⑧天智朝末期(668~671)

a)朝鮮半島情勢

・唐は百済に続いて668年に高句麗を滅ぼし、次は倭国を攻める段階にあった。

・天智天皇は669年、遣唐使を派遣して体面を繕うが唐は既に倭国臨戦態勢にあった。

・670年、高句麗遺民が平壤で反乱を起こし、同時に新羅・文武王が唐に反旗を翻した。

また、西域でも吐蕃がチベット高原から唐の西方領に侵入した。

・この情勢変化で、唐の倭国進撃は棚上げとなり、半島情勢は流動化に入った。

⑨天智崩御

- ・天智10年(671)12月、天智天皇崩御の直前に大友皇子が太政大臣に、大海人皇子は東宮となるが、身の危険を察知して出家して吉野に逃れる。
- ・天智死後、唐から新羅攻撃への協力命令が出され倭王朝は何等の対応を迫られた。

(5)壬申の乱と天武朝

①壬申の乱(672年)

- ・大友皇子は唐の新羅征伐の軍事要請に応じて、白村江の戦いで戦力喪失の西方豪族を温存して東国豪族に出兵命令を出したが、大海人皇子はこれを東宮討伐と誤解したのか「近江朝廷は罪もない私を攻める為、天智陵造営と称して兵を集めている」と6月22日に反旗。近江朝は6月26日に大海人の反乱を知り、追討群を美濃と飛鳥に派遣。大友側の武将の寝返りが多く、朝廷軍は苦戦。飛鳥では大伴吹負に飛鳥を奪われ、河内山背に進撃され、難波・山崎の要地も征された。
- ・一方、近江・美濃方面も米原で敗退、次に彦根、守山、栗東まで敗北、退却し瀬田川まで。672年7月22日、大海人は瀬田橋を突破して近江朝廷は瓦解し、大友皇子は山崎で自害。672年9月、大海人皇子は野上行宮から飛鳥・後岡本宮に入る。

②天武朝前半(673～681:飛鳥浄御原宮)

a) 飛鳥浄御原宮・天武天皇即位(673)

大海人皇子は齊明・天智の旧宮(岡本宮)の南側に「新宮・後岡本宮＝浄御原宮」を造営。浄御原宮は東西94m、南北55m、中央に我が国初めての大極殿(9間×4間)、その前に朝堂を備えた西庁があったと推測されている。

673年天武天皇即位、鸕野皇女(後の持統天皇)を皇后として長子草壁皇子が誕生。

b) 政治体制

壬申の乱で天智朝6人の太政官が姿を消し天武は大臣を置かずに直接采配の皇親政治を。太政官組織は御史大夫を納言に改称し天皇の皇子等の皇族を政治に参画させ重用。中央官制はほぼ近江令のままとし天智朝の官僚制・公民制が天武朝で完成した。天武4年部曲廃止詔公布。

c) 朝鮮半島情勢

天武朝前半の朝鮮半島では唐と新羅の対立が続いていた。672年壬申の乱頃には唐が平壤付近の高句麗・新羅連合軍と戦闘中。674年唐の高宗は劉仁軌を鶏林道に派遣して新羅を攻めた。この後新羅が踏ん張り、676年唐の安東都護府を平壤から遼東へ追い返し朝鮮半島は新羅の統一時代に入った。この情勢化、新羅からしばしば倭国に使者が派遣されたが、天武朝は新羅に軍事援助をせず、半島情勢の急変に備えることになる。

d) 仏教政策と寺院(官大寺等)

仏教保護
川原寺 齊明天皇の宮殿であり、後に殯の場(661)ともなった飛鳥川原宮跡に天智朝で創建され、天武朝で倭国第2の官大寺川原寺(現弘福寺)となる。

川原寺は1塔3金堂の川原寺様式と言われる伽藍配置で近江京の南滋賀廃寺や大宰府の観世音寺など白鳳寺院で採用された。特に軒瓦の複弁瓦が全国で使用された。天武2年(673)に500戸の封戸を与えられ、一切経を書生に写経させ、押坂王家の菩提寺となった。

百済大寺 最初の勅願寺で押坂王家の根本寺院の百済大寺は天智7(668)に丈六釈迦如来像が納入され、天武2(673)年に高市に移設され財源も付与された。更に天武6(677)に大官大寺の寺号が与えられた。天武は倭国第一の寺院として飛鳥近傍に置いて倭京の護りとした。

飛鳥寺 我が国初めての本格的寺院・飛鳥寺は「乙巳の変」で天皇家に接收され、天武朝で本格的整備が進められた。富本銭で知られる飛鳥池遺跡の工房群も飛鳥寺改修の為使用されたと考えられる。

京内24寺 天武9(680)年、天武天皇は宮中・諸寺で金光明経を講説させ京内二十四寺に布施を。二十四寺は天武朝倭京の北大路～南檜前の南北間、山田道～下ツ道の東西間に配置された。

仏教行事 浄御原宮は仏教施設を備えた王宮で国家的な仏事は王宮で、天皇家の私的仏事は官大寺で行われた。また当時、倭京には僧尼が4～5千人いたと推定されている。齊明朝・天智朝では仁王経が重視され、天武朝では金光明経が加わった。

天武9(680)孝徳朝から続いていた造時支援政策が国大寺と飛鳥寺だけになった。

道昭 天智・天武朝で活躍した僧侶に百済系氏族出の道昭がいる。道昭は白雉4(653)遣唐使で長安城の赴き玄奘三蔵に師事し、齊明7年(661)、玄奘のインド経典翻訳版を多数倭国に持ち帰った。帰国後、道昭は飛鳥寺近くに禅院を建て層尼に教えていたが

市中に出て、井戸掘り、橋架けなどの社会事業を始めた。十数年の遊行後、飛鳥寺禪院に戻った。

e)神祇祭祀(神道も重視)

大化改新以降、国家の思想基軸は「仏教」と「儒教」であったが、神祇祭祀も重視。

倭王朝は天神地祇の観念を受け継ぎ、正当性の証しとして祭祀は不可欠。

- ・大化元年(645)、孝徳天皇は大槻の下に群衆を集めて天神地祇挙行。
- ・天武8年(679)、天武天皇は吉野宮で「天神地祇及び天皇への誓い」を実施。
- ・持統天皇は近江令完成施行に当たり神事を、即位に際して「天神寿詞」を宣読。
- ・7世紀半、難波津長柄豊崎宮では律令祭祀具(斎串、形代、土馬等)が多用され神事が全国に広がった。
- ・神社にはもともと、神殿が無かったが仏教寺院の影響を受け8世紀頃から建設された。
- ・天武10年(681)になって初めて諸国神社の修理が発生した事からも神殿施設は新しい。
- ・新嘗祭、鎮花斎、伊勢祭祀は大化以前に遡るが大宝律令で国家的祭祀となる。
- ・天智9年(670)祈年祭が国政整備で創始された。
- ・天武朝で竜田神、広瀬神の祭祀が始まり、律令信義祭祀が完成した。

③天武朝後半(天武10年～)

1. 律令体制の確立(天武10年681)

新羅により朝鮮半島が平定され、唐の倭国への脅威が薄れ平時体制確立が急がれた。

天武10年(681)律令国家建設への転換となる重要な改革がスタート。(律令の改定は立太子時に)天武10年(681)、新しい国家基本法として「浄御原令編纂」の勅命。

- ・天武8年(679)、吉野宮で草壁・大津・高市・忍壁、河島、施基を集めて後継は草壁の誓約を受けて、天武10年(681)、天武と持統の長子、草壁皇子が皇太子となる。

2. 浄御原令の布告(681年)

親律令の制定宣告は飛鳥浄御原宮の「大極殿」で発布され律令編纂参画者を指名。残念ながら浄御原律令の条文はどこにも残っていない。

- ・浄御原令は近江令と同じく律を伴わない。(行政改革が中心で刑法は唐律を踏襲)
- ・天武9年、11年と2度に渡り、国政に役立つ方策があれば申し出るように詔が出された。
- ・浄御原令は持統3年(689)に施行された。(令一部二十巻)、
- ・浄御原令は天智元年(668)発布の近江令を基本として修正・充実がなされたもの。
- ・この後、藤原不比等による大宝律令(701)、養老律令(718)編纂へと続く。

3. 浄御原令(礼法・冠位制)の内容

a)服飾規定(681)

681年・禁式九十二条:皇子から庶民までの服飾規定を発布

- ・天武11年(682):官人が位冠・襪・褶・膳夫の襷等禁止、采女の肩巾禁止。
- ・男女とも髪を結うこと、男官の漆紗冠の着用、

b)48階冠位制(685)

天智朝の26階冠位制が改められ、更に官人の序列化が進んだ。

c)宮廷儀礼(682)

天武11年「礼儀・言語」に関する詔が出され、宮廷での振る舞い、言葉遣いを規定
跪礼・匍匐礼の禁止など朝礼作法も改定

d)「八色の姓」(官人組織改正)

- ・681年:氏上制の徹底により官人社会秩序の創世。
- ・682年:官人の昇進に族姓基準を取り入れる。(どの氏に属するか明確にする)
- ・683年:「八色の姓」54氏に姓を付与、真人・朝臣・宿祢・忌寸・道師・臣・連・稻置の8族姓統合

e)史書の編纂(681～)

天武天皇は河島皇子、忍壁皇子以下王族・官人に「帝紀及び上古の諸事」を記し定めるように命じた。最終的に日本書紀の編纂事業として養老4年(720)に完成して、舍人親王により奏上された。6世紀頃筆録の「旧辞」「帝辞」・各種記録・伝承を原資料として作成された。同じく、天武天皇は「帝紀」「旧辞」に偽りが多いため添削を加えて稗田阿礼に暗誦させておいたが、和同元年、元明天皇は太安万侶に命じて「勅語の旧辞」を撰録させ「古事記」天皇家の私的事業の記録として完成された。天武天皇は史書の編纂を王権を正当化する国家的事業と位置付けたようである。

f)その他の政策

天武10年(681)には、この他、藤原京の建設、諸国国境の画定、富本銭の発行などの国家支配の根本となる政策が相次いだ。

g)天武朝アジアの情勢

唐の脅威 天武4年(675)年唐・新羅戦争は新羅の勝利に終わる。翌676年、唐は安東都護府を

弱体化 平壤から遼東故城へ、百済の熊津都督府を建安故城へ移したが、唐王朝は扶余隆に百済を統治させる意図が強く、678年唐の高宗は新羅征討を意図するが、チベット高原で吐蕃勢力が強くなったため、東征して新羅を討つ余裕がなくなった。吐蕃は679年以降勢力が衰えて、唐の北方で東突厥が急成長しモンゴル高原に覇を唱えた。680年代、ユーラシア東部には(唐-吐蕃-突厥)の三極構造が生まれた。このような状況下で、倭国の臨戦態勢は一休みとなり、官僚制度の充実で中央集権体制の確立に専念できた。これが天武10年の改革につながった。

h) 天武朝終焉(686)と持統即位(690)
天武15年(686)9月、天武天皇逝去。10月には大津皇子が危険分子とみなされ謀反の罪で処分された。草壁皇子は殯を指揮して、大内陵を造営し埋葬を終えたところで亡くなった。草壁には珂瑠・氷高・吉備の3人の子女がいたが若年の為、皇后鸕野が持統天皇として690年即位した。

④持統朝(持統元年687年～690即位～697讓位～703死去)

a) 持統即位(690)と文武天皇へ讓位

持統の画像 日本書紀は、天武天皇の死後、皇后鸕野が「臨朝称制」したとし、687年を持統元年と号す。天武15年(686)、天武天皇逝去の年、鸕野皇后等により、後継強敵の大津皇子を謀反の罪で抹殺したが、愛孫の草壁皇子が持統3年(689)に急逝した為、高市皇子を後皇子尊とし、太政大臣に任命し、草壁の子女・珂瑠に繼承させるべく皇后鸕野が690年持統天皇即位。持統10年(696)高市皇子が死去した為、持統11年珂瑠を15歳で皇太子とし「天武→草壁→珂瑠」の直系皇位繼承をもくろんだ。更に、持統11年孫の珂瑠皇太子(文武天皇)に讓位し自らは太上天皇と称して文武天皇を後見した。「天武-草壁-文武」の直系皇位繼承はこの後、中継ぎ女性天皇のモデルとなった。持統天皇は天武天皇の政策をそのまま引き継ぎ実現した。

b) 浄御原令(688)公布と庚寅(コウイン)年籍(689)

天武立案 持統3年(689)に草壁即位に備えて準備されていた「浄御原令」が公布され、戸籍の作成が命じられた。これが持統4年に庚午年籍以来20年ぶりに作成された庚寅年籍である。浄御原令の「戸令」により作成された戸籍は1年程で完成。この時正丁4人に1人の徴兵率が決まり、「六年一造の制」も施行された。

c) 藤原京遷都(694)

天武立案 持統8年(689)、持統天皇は藤原京に遷都、藤原京は天武天皇が造営を決意していた。
持統朝遷都・天武5年(676)、天武天皇は新城を都にする為に田畑の耕作をやめたが造営は中止。
・天武11年(682)、天武は改めて新宮都を建設すべく藤原京の地に使者を派遣した。
・天武13年(684)、天武は「京師」を巡行して新宮都を建設するセレモニーを藤原京で行った。
・持統4年(690)、持統天皇は即位後すぐに新都建設再開の意思表示。
・持統5年(691)、持統天皇は「新益京」の地を鎮める祭儀を執り行った。
・持統8年(694)、持統天皇は藤原京に遷都。

藤原京は、倭国最初の基盤目「十条十坊の王都」であった。全体の大きさは東西、南北とも5.3kmの大正方形区画で、唐の長安京を模したもので、但し藤原宮(大極殿)は藤原京の中心に置かれた。藤原宮は920m*920mの正方形王宮として設計され、四周に大垣が巡り、各周に氏族名の付いた門が3個、合計12の門があった。中枢施設は難波長柄豊崎宮とよく似た配置を取る。藤原京は律令体制確立期にふさわしい巨大王都であった。

d) 複都性

天武朝 唐は西京西安、東都洛陽と複都制であった。新羅は五小京制であった等の情報によるか大化改新以降、難波京、近江京へ遷都した時も倭京飛鳥がそのまま置かれていた。天武天皇は、藤原京建設と並行して、複数の都を持つ、「複都制」を模索していた。まず、難波京を陪都にする事にし、天武8年、難波京に羅城(城壁)を建設。天武13年(684)、難波京の他に畿内に都城を建設する地点を調査、天武14年(685)更に遠方、「信濃京」造営の行幸が行われたが、天武の病で中止となった。

持統朝 持統3年(689)、筑紫大宰府に「新城」監督する使者が派遣されている。

[3]飛鳥時代の年表

永野

古墳時代

507	継体1	継体天皇即位(河内国樟葉):樟葉→筒城→弟国→磐余玉穗宮
527	継体27	筑紫国造「磐井の反乱」(磐井が近江毛野氏の朝鮮出兵を阻止)
534	安閑1	安閑天皇即位(各地に屯倉を設置)、武蔵国で毛野氏の台頭
536	宣化1	宣化天皇即位(大臣は蘇我稲目)、蘇我:武内→石川→満智→高麗→稲目
539	欽明1	欽明天皇即位(継体と仁賢の娘・手白香皇女の皇子)蘇我氏外戚(稲目2娘)
540	欽明元	百済と連携して任那に日本府を置く。
(547)	欽明8	高句麗が百済に侵攻
552	欽明13	仏教伝来(百済軍事援助の見返りとして聖明王から金銅仏像が献上された)
562	欽明23	伽那(加羅)が新羅に滅ぼされる
572	敏達1	敏達天皇即位(蘇我馬子、物部守屋)
(581)	(中国)	中国で隋国の誕生
587	用明2	蘇我馬子が物部守屋を滅ぼす。馬子が飛鳥寺の創建に着手
591	崇峻4	任那奪環の為2万の兵が北九州まで赴いたが交戦せずに終わった。

飛鳥時代

592	崇峻5	推古天皇即位(豊浦宮)、蘇我馬子、崇峻天皇暗殺
593	推古1	聖徳太子摂政となる
600	推古8	第1回遣隋使派遣、新羅と任那をめぐって交戦し新羅が和平を乞うて来た。
603	推古11	冠位十二階制定、王宮を豊浦宮(とゆら)から小墾田宮(おわりだ)に移す
604	推古12	憲法17条制定
607	推古15	小野妹子を中国隋に派遣(遣隋使)
608	推古16	隋使「裴世清」妹子に伴い来朝
(618)	(中国)	隋が滅び、唐の誕生
630	舒明2	第1回遣唐使派遣(犬上御田助)、僧・玄奘イトへ
639	舒明11	百済宮造営、百済大寺造営開始
642	皇極1	皇極天皇即位
643	皇極2	(蘇我入鹿、山背大兄皇子と一族を滅ぼす)
645	孝徳1	大化の改新、孝徳天皇即位
	//	乙巳の変(中大兄皇子・中臣鎌足ら蘇我入鹿を暗殺)
	孝徳1	大化の改新始まる(孝徳天皇、難波宮へ遷都)
646	孝徳2	「改新の詔」発布
649	孝徳5	孝徳天皇崩御、白雉1
652	白雉4	班田収授法の施行
655	斉明1	斉明天皇即位(皇極天皇重祚)
658	斉明4	安倍比羅夫、蝦夷を討つ、有間皇子
663	天智2	白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗
670	天智9	庚午年籍をつくる
672	天武1	壬申の乱、飛鳥浄御原宮へ遷都
(676)	(朝鮮半島)	新羅、朝鮮半島統一
684	天武3	八色の姓制定
689	天武8	飛鳥浄御原令施行
(690)	(中国)	則天武后の即位

(白鳳時代)

694	持統8	藤原京へ遷都
701	大宝1	大宝律令完成
708	和同1	和同開珎鑄造
710	和同3	平城京へ遷都(奈良時代)